

沢田古墳群

国道125号大谷バイパス建設事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1

平成19年3月

竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第276集

沢田古墳群

国道125号大谷バイパス建設事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1

平成19年3月

竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

一般国道125号は、千葉県から茨城県、埼玉県へと伸びる広域な幹線道路であり、産業や経済活動を支える動脈として極めて重要な路線であります。

しかしながら、近年、各都市の市街地で交通渋滞が発生しており、大谷バイパスはこの交通渋滞を解消し、周辺環境の向上等を目的として計画されたもので、その予定地には沢田古墳群が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、竜ヶ崎土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年4月から同年6月まで沢田古墳群の発掘調査を実施しました。

本書は、沢田古墳群の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である竜ヶ崎土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、美浦村教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人見 實徳

例　　言

1 本書は、茨城県竜ヶ崎土木事務所の委託により、財團法人茨城県教育財團が平成17年度に発掘調査を実施した。茨城県稲敷郡美浦村大字大須賀津字沢田1243-3番地ほかに所在する沢田古墳群の発掘調査報告書である。

2 遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調　　査 平成17年4月1日～平成17年6月30日

整　　理 平成18年4月1日～平成18年6月30日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長 横村 宣行

主任調査員 本橋 弘巳

副主任調査員 駒澤 悅郎

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、主任調査員本橋弘巳が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X軸=+480m、Y軸=+42,800mの交点を基準点(A 1 al)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに、小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…oとし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 al区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 SD-溝跡 TM-古墳 P-柱穴

遺物 TP-拓本記録土器 Q-石器・石製品 M-古銭

土層 K-搅乱

3 土層観察と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

4 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・旧表土 炉 黒色土

● 土器 □ 石器・石製品 △ 古銭 --- 硬化面

なお、出土した土器片の器種を区別して図示する場合は、別に表示した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は300分の1、遺構実測図は古墳が150分の1、住居・土坑は60分の1、溝は120分の1に縮尺して掲載することを基本とした。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

6 「主軸方向」は、住居については炉の中心を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その他の遺構については、長軸(長径)方向を主軸とみなした。主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N-10°-E)。なお、[]を付したものは推定である。

7 遺物観察表の記載方法は、次の通りである。

(1) 計測値の単位は、法量がcm、重量がgである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ記載の土器片、石器・石製品、古銭ごとに通し番号とし、観察表の備考欄に示した。挿図番号は遺構ごとし、写真図版に記した番号も同一である。

8 遺構一覧表における計測値の単位は、m・cm及びgである。現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

抄 錄

目 次

序

例 言

凡 例

抄 錄

目 次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 繩文時代の遺物	8
遺物包含層	8
2 弥生時代の遺構と遺物	10
豎穴住居跡	10
3 古墳時代の遺構と遺物	14
(1) 古墳	14
(2) 土坑	24
4 近世の遺構と遺物	26
溝跡	26
5 その他の遺構と遺物	27
(1) 土坑	27
(2) 溝跡	31
(3) 遺構外出土遺物	31
第4節 まとめ	33

写真図版

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

竜ヶ崎土木事務所は、首都圏全体の発展と交通の円滑化を図るために、一般国道125号大谷バイパスの建設を進めている。

平成16年7月20日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、国道125号大谷バイパス建設事業における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は平成16年8月10日に沢田古墳の現地踏査を、平成16年12月7日に試掘調査を実施し、沢田古墳が所在することを確認した。平成16年12月22日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、事業地内に沢田古墳が所在する旨回答した。

平成17年1月14日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現第94条）の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘が必要であると判断し、茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成17年2月8日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、国道125号大谷バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成17年2月15日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、沢田古墳について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財團法人茨城県教育財團を紹介した。

平成17年5月23日、財團法人茨城県教育財團が発掘調査を実施したところ、古墳の周溝とみられる遺構が新たに確認され、発掘調査区域外へ広がる可能性がでてきたため、茨城県教育委員会は再度試掘調査を実施した。平成17年5月25日、茨城県教育委員会は再試掘調査の結果、埋蔵文化財の所在範囲が広がることを茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに通知した。また、遺跡名称を試掘調査及び発掘調査の状況から沢田古墳群に変更した。

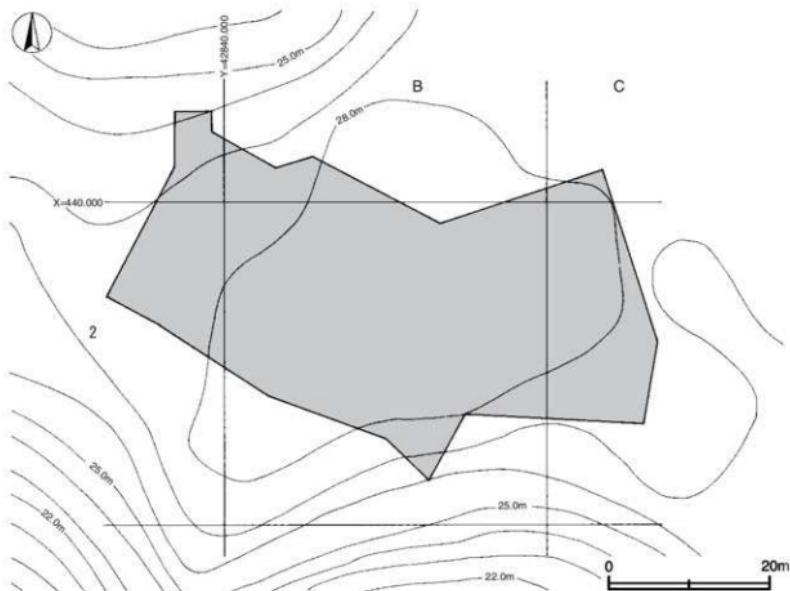
平成17年5月26日、再試掘の結果を受けて、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎土木事務所長及び財團法人茨城県教育財團理事長あてに国道125号大谷バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査計画の変更についての協議書が提出された。同日に、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長、財團法人茨城県教育財團理事長あてに国道125号大谷バイパス建設事業に関わる発掘調査計画の変更について回答した。平成17年5月27日、財團法人茨城県教育財團理事長は、茨城県教育委員会教育長あてに国道125号大谷バイパス建設事業に関わる発掘調査計画の変更について回答した。

財團法人茨城県教育財團は、茨城県竜ヶ崎土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年4月1日～平成17年6月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

沢田古墳群の調査は、平成17年4月1日から同年6月30日まで実施した。その概要を表で記載する。

工程	月	4月	5月	6月
調査準備				
表土除去				
構確認				
遺構調査				
遺物洗浄				
及び 注記作業				
補足調査収				



第1図 沢田古墳群調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

美浦村は、北部及び東部は霞ヶ浦に面しており、桜川と小貝川に挟まれている稲敷台地の先端部に位置し、その台地は標高20~30mの比較的低い台地となっている。霞ヶ浦に流入する清明川や高橋川などによって、その台地は樹枝状に開析されている。

沢田古墳群は、美浦村中央部の南東へ伸びる標高25~29mの舌状台地縁辺部に立地し、南西には高橋川流域の低地から伸びる支谷が入り込んでいる。遺跡の調査前の現況は山林である。

第2節 歴史的環境

美浦村は河川、低地、台地と変化に富んだ自然環境を示し、台地上には数多くの遺跡の分布が認められており、これまで旧石器時代から近世までの約140遺跡が周知されている。ここでは主な遺跡について時代を追って述べる¹⁾。

旧石器時代は近年石器の出土点数も増加しているが、村内での明確な生活痕跡の様相はつかめていない²⁾。

縄文時代は、かつて霞ヶ浦の入り江であった余郷入から続く主谷两岸に多くの貝塚が発見されている。前期の興津貝塚〈2〉、前・中期の虚空蔵貝塚〈3〉、早・中期の大谷貝塚〈4〉、中・後期の平木貝塚〈5〉などが散在し、長期にわたり生活の拠点となっていたことがうかがえる。また国指定史跡として著名な陸平貝塚〈6〉は、日本人の手による最初の学術発掘が行われた遺跡であり、多くの研究者によって調査や研究が行われている³⁾。

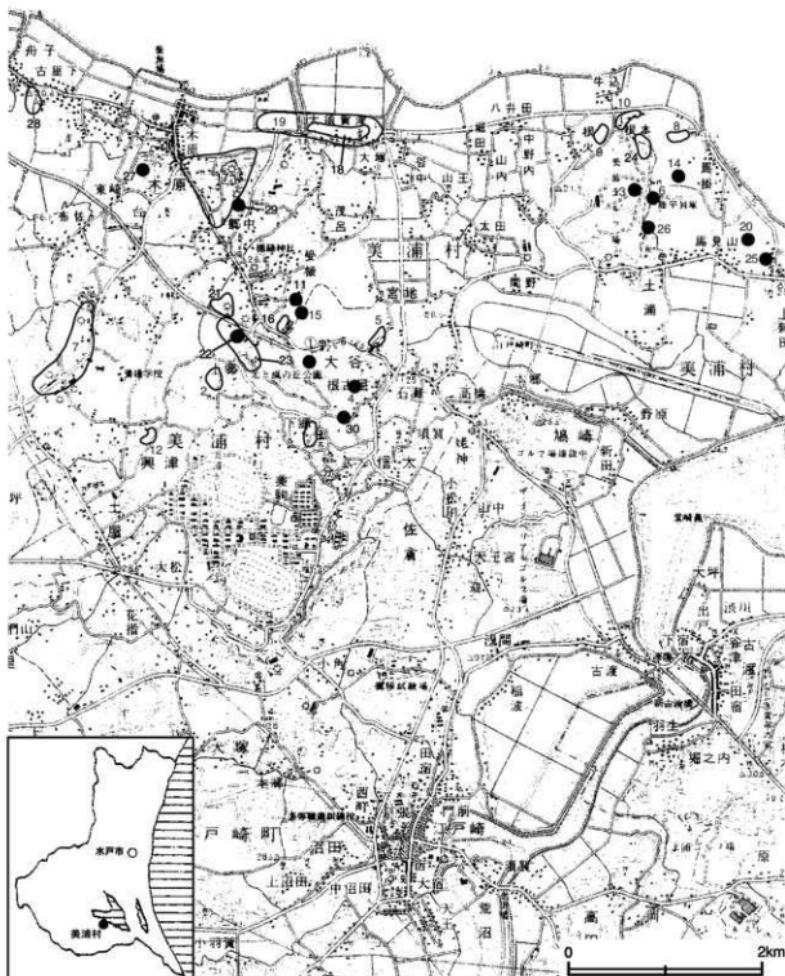
弥生時代の遺跡としては、中期の常陸笠山遺跡〈7〉、多古山Ⅱ遺跡〈8〉や後期の陣屋敷遺跡〈9〉、根本遺跡〈10〉などがあげられる。根本遺跡と陣屋敷遺跡は共に後期後半の時期に位置づけられるが、出土土器は別型式であり、谷を挟んで隣接する両遺跡の関係が注目される⁴⁾。

古墳時代の遺跡は多く確認されている。八ヶ山遺跡〈11〉、興津白井遺跡〈12〉、宮脇遺跡〈13〉、ミコヤ遺跡〈14〉、請領妙山遺跡〈15〉、陣屋敷遺跡などは、中期の集落跡として確認されている。そのほか当遺跡の東側には刈溝田遺跡〈16〉が位置している。古墳としては、県内の出現期古墳のひとつと考えられる愛宕山古墳を主墳とする木原原古墳群〈17〉や、岸内遺跡〈18〉と同じ微高地につくられた中期の大形円墳を主墳とする大塚古墳群〈19〉が著名であり、「常陸國風土記」逸文の「黒坂命陸奥の蝦夷を討罰で…黒坂命病に遇いて身故りき。…後の世の言に便ち信太の国と称う。」について、国学者色川三中は、陸奥より凱旋途中で病死した黒坂命を信太・大塚古墳に埋葬したと紹介している⁵⁾。また木の根田遺跡〈20〉と根本遺跡でも小規模な古墳群が確認されている。根本遺跡の第1号墳では、滑石製模造品の未製品及び剥片が出土しており⁶⁾、当遺跡との類似した様相がうかがえる。いずれの古墳も独立した狭い台地の平坦部に位置しており、同じ台地上に集落と墓域が位置していると想定できる。野中遺跡〈21〉や箱式石棺から人骨、金環、青銅環、ガラス小玉が検出されている後期の庚申古墳〈22〉が含まれる八枚原古墳群〈23〉は、当遺跡と谷を挟んだ西側に立地している。

奈良・平安時代では、御靈平遺跡〈24〉、内出遺跡〈25〉、池端遺跡〈26〉などが周知されており、池端遺跡では8世紀末~9世紀初頭の須恵器を用いた火葬墓が検出されている⁷⁾。



霞ヶ浦



第2図 沢田古墳群周辺遺跡分布図

中世末から近世では、土岐氏が南の固めとして竜ヶ崎城、北の固めとして木原城³⁾（27）を築き、信太の各地に土塁や空堀から構成される防御施設を設けている。ほかにも陣屋敷遺跡、城ノ内遺跡²⁸⁾、御茶園遺跡²⁹⁾、大谷根古屋城跡³⁰⁾など、武家支配を物語る多くの城跡も確認されている³¹⁾。

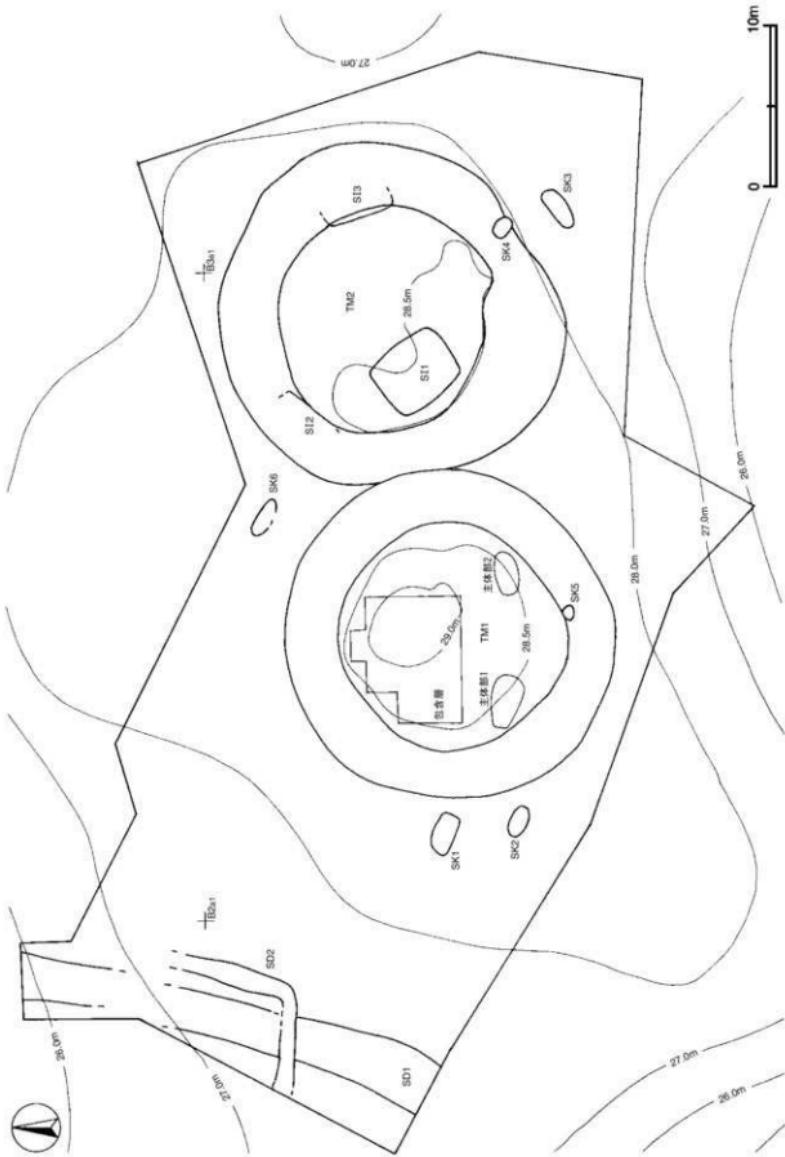
※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) a 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会 平成13年3月
- b 美浦村教育委員会『茨城県福数郡美浦村 美浦村遺跡分布調査報告書及び美浦村遺跡分布図』 2002年
- c 高橋嘉朗「美浦村の古墳と古墳群」「美浦村史研究」6 美浦村史編さん委員会 平成2年3月
- 2) 美浦村史編さん委員会『美浦村誌』 1995年11月
- 3) 中村哲也ほか『陸平貝塚 調査研究報告書1・1997年度発掘調査研究報告書』美浦村教育委員会 2004年3月
- 4) 中村哲也ほか『根本道路』美浦村・陸平調査会 1996年3月
- 5) 註1) に同じ
- 6) 註4) に同じ
- 7) 中村哲也・川村勝『池端遺跡 発掘調査報告書』美浦村教育委員会 2004年3月
- 8) a 後藤和民ほか『木原城址Ⅱ 平成6年度予備発掘調査概報』美浦村木原城址調査会 平成7年3月
b 川村勝『木原二本松遺跡・木原城址 県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書』美浦村教育委員会 2005年2月
- 9) 註1) に同じ

表1 沢田古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代					
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良			旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良	中世
①	沢田古墳群	○	○	○			○	16	刈満田遺跡		○	○		
2	興津貝塚	○						17	木原原古墳群		○			
3	虚空藏貝塚	○	○	○				18	岸内遺跡	○	○	○	○	○
4	大谷貝塚	○		○				19	大塚古墳群			○		
5	平木貝塚	○	○	○	○			20	木の根田遺跡	○	○	○		
6	陸平貝塚	○	○		○	○		21	野中遺跡	○	○	○		
7	常陸笠山遺跡			○				22	庚申古墳			○		
8	多古山Ⅱ遺跡	○	○		○			23	八枚原古墳群			○		
9	陣屋敷遺跡	○	○	○	○	○		24	御靈平遺跡	○	○	○	○	
10	根本遺跡	○	○	○	○	○		25	内出遺跡	○	○	○		
11	八ヶ山遺跡		○	○				26	池端遺跡			○	○	
12	興津白井遺跡	○	○		○	○	○	27	木原城跡	○	○	○	○	
13	宮脇遺跡	○	○	○	○	○		28	城ノ内遺跡		○	○	○	
14	ミコヤ遺跡	○		○	○			29	御茶園遺跡	○	○	○	○	○
15	請領妙山遺跡		○	○				30	大谷根古屋城跡				○	



第3図 津田古墳群遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

前述したように、沢田古墳群は茨城県稲敷郡美浦村大字大須賀津字沢田1243-3番地ほかに所在し、標高約25-29mの高橋川左岸台地上に立地している。今回の調査面積は1,761m²で、調査前の現況は山林である。

調査の結果、縄文時代の遺物包含層1か所、弥生時代の住居跡3軒、古墳2基、古墳時代の土坑3基、近世の溝跡1条、時期不明の土坑3基及び溝跡1条が確認されている。出土遺物は収納コンテナ(60×40×20cm)に5箱出土している。主な出土遺物は縄文土器片、弥生土器片、石器(ナイフ形石器・石鏃)、古墳時代の土師器片(壺・高壺・壺・甕)、須恵器片(甌・壺・甕)、石製品(剣形未製品)、奈良時代の須恵器(短頭壺)、江戸時代の古銭である。

第2節 基本層序

基本層序を確認するテストピットは、調査区北西部のB-1d0区に設置した。地表面の標高は28.5mで、地表面から2.5mほど掘削し、基本土層図は第4図に示した。

土層は12層に細分され、第1層が表土(耕作土)、第2~11層が関東ローム層、そして第12層が常総粘土層に対比される。以下、テストピットの観察から、各層の特徴を述べる。

第1層は黒褐色の腐植土層で、ローム小ブロックを含んでいる。粘性・締まりは普通で、層厚は17~38cmである。

第2層は褐色のソフトローム層で、炭化粒子を微量含んでいる。粘性・締まりは普通で、層厚は12~30cmである。

第3層は褐色のハードローム層で、黒色粒子を含んでいる。粘性は普通で締まりは強く、層厚は8~22cmで、第1黒色帯に相当すると考えられる。

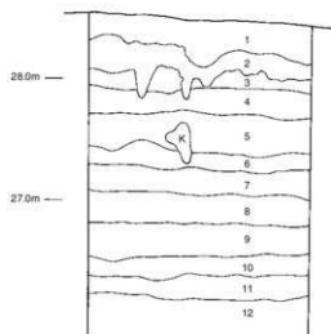
第4層は褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりとともに強く、層厚は15~25cmである。

第5層は褐色のハードローム層で、赤色粒子を微量含んでいる。第4層よりやや色味が強い。粘性が強く、締まりは極めて強く、層厚は20~35cmである。

第6層はにぶい褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性が強く、締まりは極めて強く、層厚は10~20cmである。

第7層はにぶい褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性が強く、締まりは極めて強く、層厚は17~23cmである。第6層よりやや明るめの色調であるため分層したが、ともに第2黒色帯に相当すると考えられる。

第8層はにぶい褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量



第4図 基本土層図

量含んでいる。粘性が強く、締まりは極めて強い。第6・7層よりやや色調が強く、層厚は20~25cmである。

第9層はにぶい黄褐色のハードローム層で、黒色粒子を微量含んでいる。粘性が強く、締まりは極めて強く、層厚は21~31cmである。

第10層はにぶい黄褐色のハードローム層で、鉄分、黒色粒子を微量含んでいる。粘性が強く、締まりは極めて強く、層厚は14~19cmである。

第11層はにぶい黄褐色のハードローム層で、鉄分を少量含んでいる。粘性・締まりともに強く、層厚は14~21cmである。

第12層以下は灰黄褐色で、常緑粘土層にあたる。粘性が強く、締まりは普通で、層厚は不明である。

なお、遺構は、第2層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺物

遺物包含層1か所が確認され、縄文土器片が出土している。以下、遺物包含層と主な遺物について記載する。

遺物包含層（第5・6図）

位置 調査区中央部に位置する第1号墳の旧表土下B 2 d5周辺で確認されている。

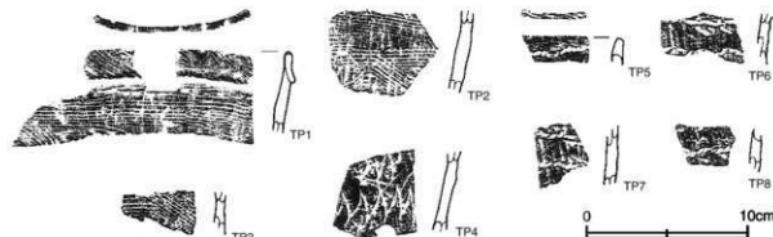
規模と形状 遺物の出土範囲は南北6m、東西6mで、旧表土面から10~20cm掘り下げた位置でほとんどが出土している。

覆土 2層に分層される。第1層はソフトローム層への漸移層であり、第2層は基本層序の第2層にあたるソフトローム層である。

土層解説

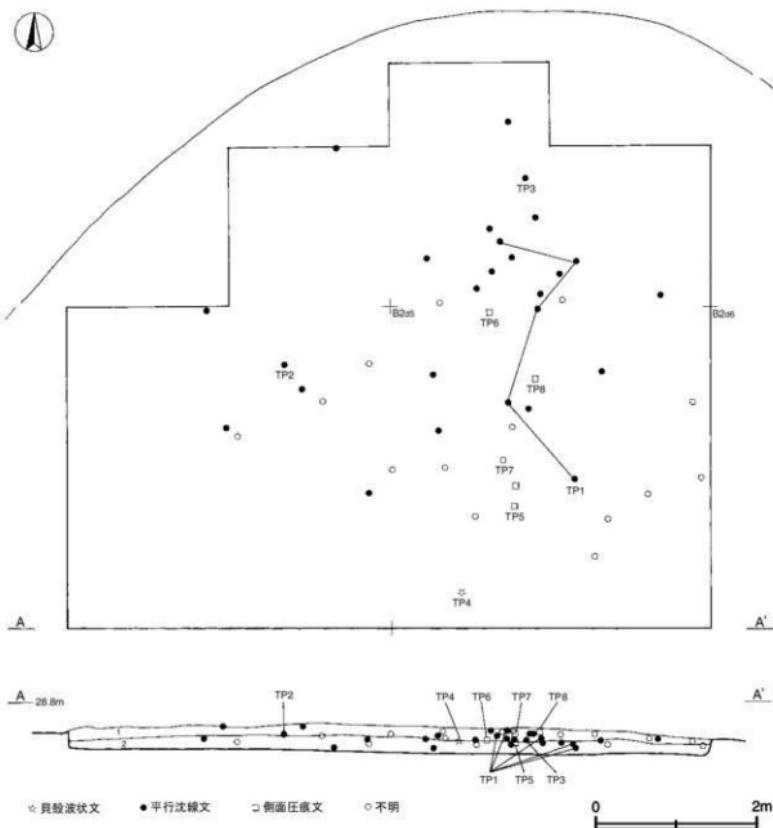
1 基 色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 基 色 ロームブロック中量、炭化物微量

遺物出土状況 縄文土器片42点の多くが第1層から第2層の上面で出土している。土器の文様は、貝殻波状文系の土器が1点、平行沈線文系の土器が22点、側面圧痕文系の土器が4点、また文様が摩滅してしまっているものや、無文帶で時期が特定できない土器が15点であり、前期後半の特徴を表している。なお、破片の点数が



第5図 遺物包含層出土遺物実測図

少數であることから明確ではないが、文様の時期や形状から推定される個体数は、深鉢およそ4点と思われる。
所見 遺物は第1号墳の旧表土下の平坦な部分から出土しており、包含層と考えられる。



第6図 遺物包含層実測図

遺物包含層出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴	出土位置	備 考
TP1	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英	黄橙	普通	複合口沿部及び側部外表面彫刻文施文、口唇部に三角印痕文	B2d5~B2d5	PL10 前期未収集
TP2	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英	橙	普通	側部外面彫刻文施文	B2d4	PL10 前期未収集
TP3	縄文土器	深鉢	—	(2.6)	—	長石・石英	橙	普通	側部外面彫刻文施文	B2d5	PL10 前期未収集
TP4	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	長石・石英	浅黄	普通	側部外面貝殻波状文施文	B2d5	PL10 前期後半

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP5	陶文土器	深鉢	—	(1.7)	—	長石・石英	橙	普通	口唇部側面圧痕文、口沿部外面なぞり後、裏面圧痕文施文	B 2 d5	PL10 前期末期
TP6	陶文土器	深鉢	—	(3.2)	—	長石・赤色粒子	橙	普通	側面外面縦なぞり後、側面圧痕文施文	B 2 d5	PL10 中期末期
TP7	陶文土器	深鉢	—	(3.8)	—	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	側面外面縦なぞり後、側面圧痕文施文	B 2 d5	PL10 前期末期
TP8	陶文土器	深鉢	—	(2.8)	—	長石・石英	橙	普通	側面外面縦なぞり後、側面圧痕文施文	B 2 d5	PL10 前期末期

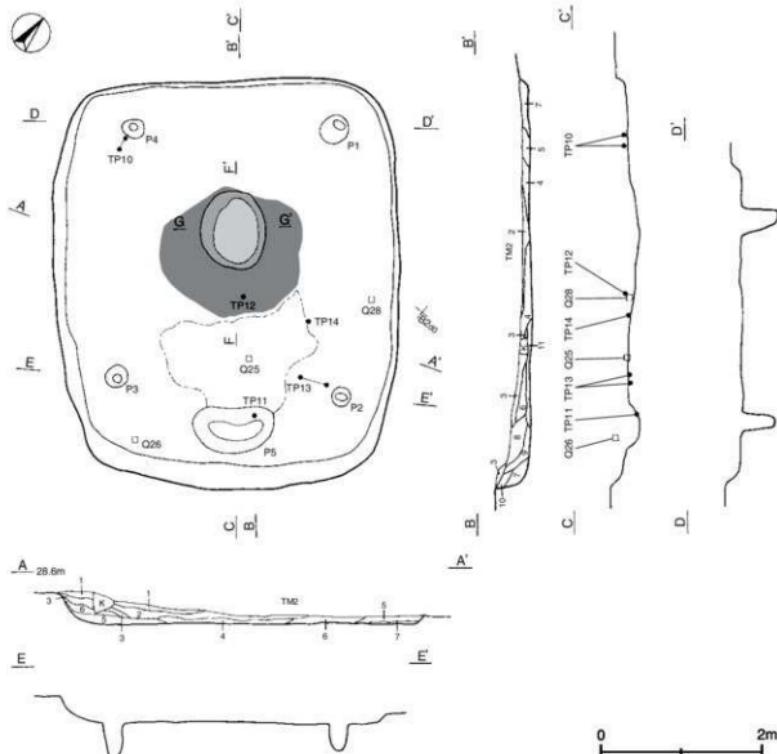
2 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、堅穴住居跡3軒が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

堅穴住居跡

第1号住居跡（第7・8図）

位置 調査区中央部東側のB 2 d9区、標高28.3mほどの第2号墳の墳丘下に位置している。



第7図 第1号住居跡実測図

重複関係 本跡が埋没した後に第2号墳が築造されている。

規模と形状 長軸5.1m、短軸4.3mの隅丸長方形で、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は10~42cmで、各壁とも外傾して立ち上がってている。

床 ほぼ平坦で、P5と炉の間が踏み固められている。また、炉を取り囲むように凹んでおり、その部分に黒色土（炉土層解説の第4層）の範囲が認められた。

炉 中央付近に付設されており、床面から12cmほど掘りくぼめられた地床炉である。炉床は加热により赤変硬化し、覆土は3層からなる。第4層は敷物類の腐食した層とも考えられるが不明である。

炉土層解説

1	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化物微量	3	暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化物・ローム粒子微量
2	黒褐色	焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量	4	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化物微量

ピット 5か所。P1~P4は配置から主柱穴と考えられ、深さは40cmほどである。P5は深さ15cmと浅いが、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

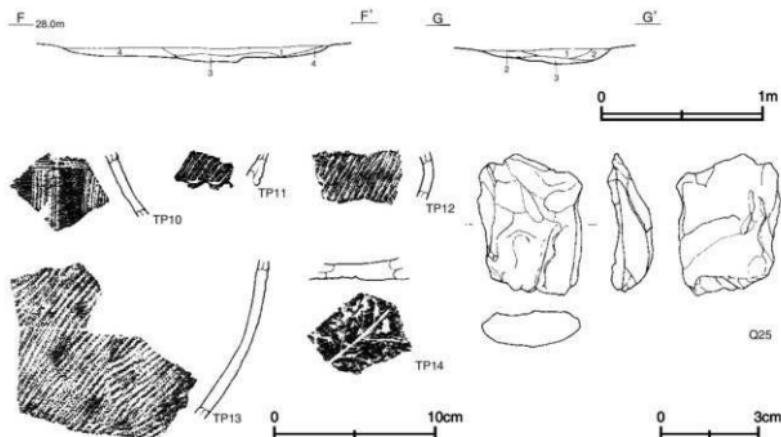
覆土 11層からなる。確認面から床面までは薄いが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8	褐色	ローム粒子中量、炭化物微量
3	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
4	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	11	暗褐色	ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子微量
6	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量			

遺物出土状況 出土した弥生土器片26点（壺）はいずれも破片で接合できるものは少ない。TP13は床面から、TP10、TP11、TP14は床面に近い高さから出土している。ほかに石英片4点が出土し、Q25はほかと比べ重量があり、加工段階のものと思われるが用途は不明である。Q26~Q28については、0.8~3.1gの細片で、図示できなかった。また混入した土師器片7点が出土している。

所見 出土遺物が少なく細片であるが、出土位置や遺物の様相から、時期は後期と考えられる。



第8図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP10 弥生土器	壺	—	(4.1)	—	長石・石英・青母	橙	普通	頭部外面横面状工具による横走文施文後、複走文施文	北部下層	PL10	
TP11 弥生土器	壺	—	(2.0)	—	長石・石英	橙	普通	口辺部外面附加条一種（附加2条）縦文施文後、比較走文	P5中層	PL10	
TP12 弥生土器	壺	—	(3.1)	—	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頭部外面附加条一種（附加2条）縦文施文	中央部下層	PL10	
TP13 弥生土器	壺	—	(9.9)	—	長石・石英・青母	橙	普通	頭部外面附加条一種（附加2条）縦文施文	南部床面	PL10	
TP14 弥生土器	壺	—	(1.4)	—	長石・石英・青母	橙	普通	底部木葉痕	中央部床面	PL10	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q25	測片	4.4	3.3	1.4	21.2	石英	石核の剥離片カ	南部床面	PL12

第2号住居跡（第9・10図）

位置 調査区北部のB2 b8区、標高28.1mほどの第2号墳の周溝内に位置している。

重複関係 本跡が埋没した後に第2号墳が築造され、また周溝に掘り込まれている。

規模と形状 ほとんどが2号墳の周溝に掘り込まれ、コーナー付近は搅乱を受けている。確認できたのは長軸4.1m、短軸1.1mで、隅丸方形または隅丸長方形で、主軸方向はN-40°-Eと推定される。壁高は14~20cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。残存部に硬化面は確認できなかった。

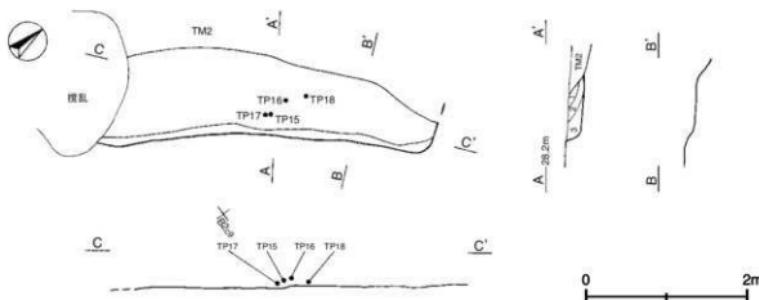
覆土 3層からなる。堆積状況は不明である。

土層解説

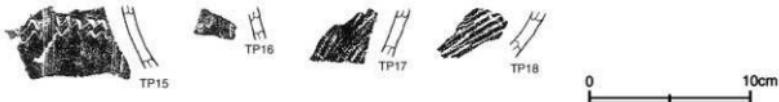
1 單褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	3 單褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
2 黒褐色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 弥生土器片6点（壺）が出土している。TP15~TP18は東壁付近の床面から出土し、ほかの2点は細片である。また混入した土師器片1点が出土している。そのほか掘り込まれた周溝の覆土中に本跡のもとのと思われる弥生土器片が流れ込んでいる。

所見 第2号墳の周溝に掘り込まれており、炉やピットは確認できなかったが、コーナー部が隅丸形であることや壁の立ち上がりと平坦な床面が確認されたことから住居跡と判断した。主軸方向は第1号住居跡と異なっているが、遺物の出土位置や様相から、時期は後期と考えられる。



第9図 第2号住居跡実測図



第10図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP15	弥生土器	壺	—	(4.0)	—	長石・石英・漂母	橙	普通	頭部外周縦彫り工具（4本削面）による縦区彫花、輪彫施工具（3本削面）による横区彫花、内ナラ	東部下層	PL10
TP16	弥生土器	壺	—	(2.1)	—	長石・石英・漂母	橙	普通	頭部外周縦彫り工具による縦区彫花、輪彫施工具（4本削面）による横区彫花	東部下層	PL10
TP17	弥生土器	壺	—	(3.0)	—	長石・石英	にぶい黄緑	普通	附加条一種（附加2条）純文施文	東部下層	PL10
TP18	弥生土器	壺	—	(2.9)	—	長石・石英	橙	普通	附加条一種（附加2条）純文施文	東部下層	PL10

第3号住居跡（第11図）

位置 調査区東部のB 3c1区、標高27.9mの第2号墳の周溝内に位置している。

重複関係 本跡が埋没した後に第2号墳が築造され、また周溝に掘り込まれている。

規模と形状 ほとんどが第2号墳の周溝に掘り込まれている。確認できたのは長軸4.35m、短軸1.17mで、隅丸方形または隅丸長方形で、主軸方向はN-20°-Wと推定される。壁高は10~42cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。残存部に硬化面は認められなかった。

覆土 3層からなる。堆積状況は不明である。

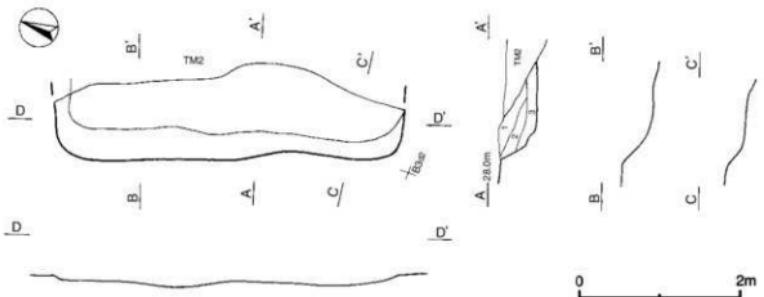
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 弥生土器（壺）の胸部細片が1点出土しただけである。本跡は第2号墳の周溝に掘り込まれており、周溝の覆土には本跡のものと思われる弥生土器片が流れ込んでいる。

所見 第2号住居跡と同様に、第2号墳の周溝に掘り込まれており、炉やピットは確認されていない。遺物は細片1点の出土であるが、平坦な床面から住居跡と判断した。周囲の状況から時期は、後期と考えられる。



第11図 第3号住居跡実測図

表2 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	面積(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 (新旧関係 (旧→新))
								主柱穴	苗入ロット	ビット	埠	若藏穴				
1	B2d9	N-30°-W	南北長方形	5.1×4.3	10~42	平坦	—	4	1	—	1	—	自然	壺片、石英片	後期	本跡→TM2
2	B2b8	(N-30°-E)	(南北長方形) (東北長方形)	(4.1)×1.1)	14~20	平坦	—	—	—	—	—	—	不明	壺片	後期	本跡→TM2
3	B3c1	(N-30°-W)	(南北長方形) (西東長方形)	(4.35)×1.17)	10~42	平坦	—	—	—	—	—	—	不明	壺片	後期	本跡→TM2

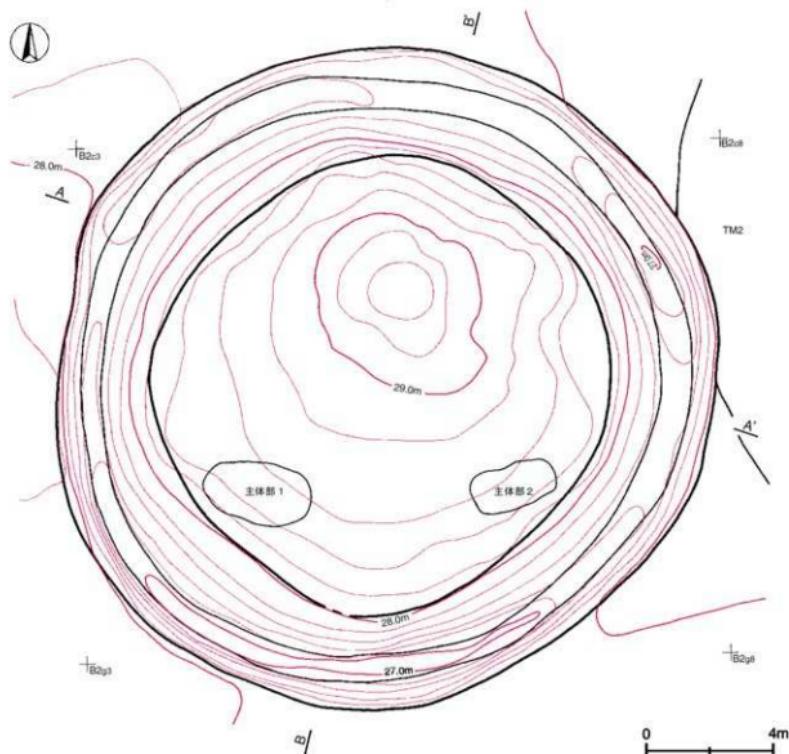
3 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、古墳2基、土坑3基が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

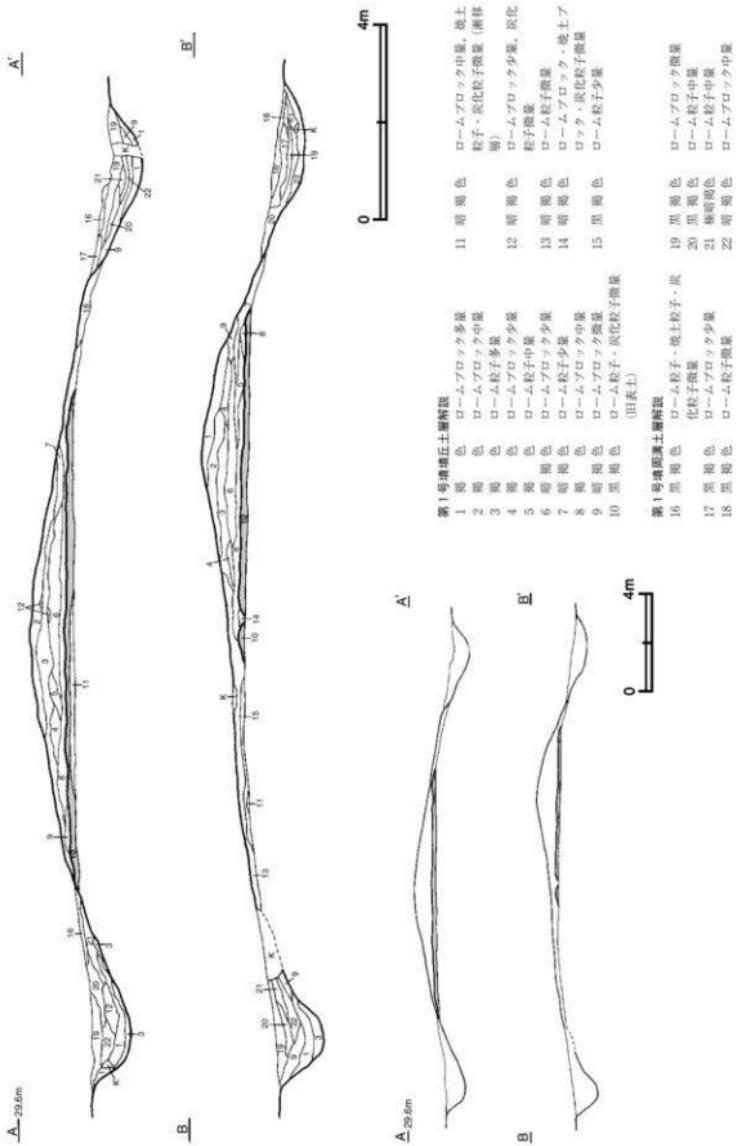
(1) 古墳

第1号墳 (第12~18図)

位置 調査区南東部のB2d5区を中心に検出され、標高28.0mほどの舌状台地の縁辺部に位置している。東側



第12図 第1号墳実測図(1)



に第2号墳の周溝が隣接している。

確認状況 調査前は山林である。墳丘の高まりは地彌れ程度でわずかに確認でき、墳丘は北側がやや急な傾斜となっており、方角により傾斜に違いがみられる。

重複関係 第5号土坑に掘り込まれ、墳丘下には縄文時代の遺物包含層が確認された。

規模と形状 墳丘径が約15m、周溝外縁径が約21mで、ほぼ正円の円墳である。

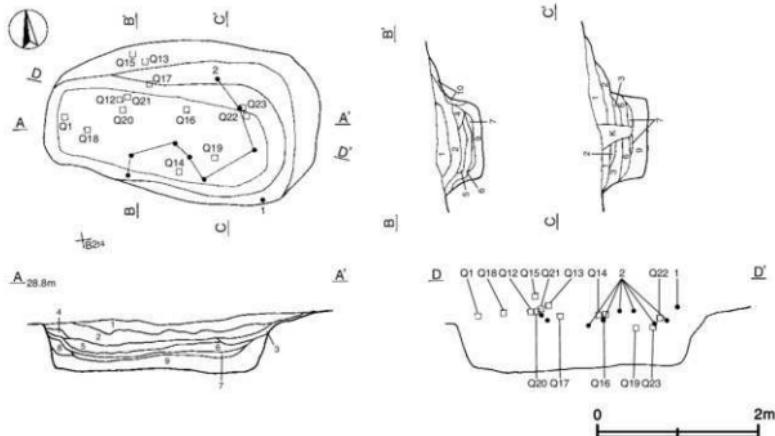
墳丘 現丘の高さは約0.9mで、墳頂部が中心より約2.6m北側にずれており、北方向の裾部がやや急な傾斜を示し、南方向の裾部は緩やかな傾斜となっている。墳丘は、旧表土にあたる第10層の上に盛土したローム主体の土層で、ほぼ平坦に積まれている。第11～15層は追葬後に墳丘を再構築した際のものか、あるいは後世に削平されて堆積したものと推定され、本来の墳丘高については明確ではない。なお、土層解説については第13図の墳丘実測図と合わせて記載する。

周溝 円形で、上幅2.8～3.8m、下幅0.5～0.9m、深さ0.6～1.0mである。南側の上幅が狭く、V字状の断面形を呈しているが、北側は上幅が広く、緩やかなU字状の浅い断面形状を示しており、さらに周溝底部の高低差が40cmほどみられるなど、掘り込みに違いがみられる。周溝内の堆積土はローム粒子及びロームブロックを中心としたもので、周溝外や墳丘から流れ込んで堆積した土層を含んでおり、11層に分層できる。土層解説については墳丘土層と同様に第13図の墳丘実測図と合わせて記載する。

埋葬施設 南西寄りの墳丘裾部に主体部1、また南東寄りに主体部2の2基が検出された。

ア 主体部1

墳丘面を旧表土まで掘り下げた段階で、南側に広く旧表土をはぎ取った痕跡が認められ、さらに落ち込みが検出された。B2e4区、形状はややくずれた長方形で、主軸方向はN-60°-Wである。長軸3.4m、短軸2.0m、深さ70cmほどで、平坦な底面を呈し、また壁は底面から中段までは直立し、北及び東壁の上段は外傾しながら立ち上がっている。覆土は長・短軸ともにレンズ状を呈しており、第5～7層の黒色土の縮まりはほかの層と比べて弱い。粘土塊や石材片は確認されず、木棺直葬と考えられるが棺材なども検出されてはいない。

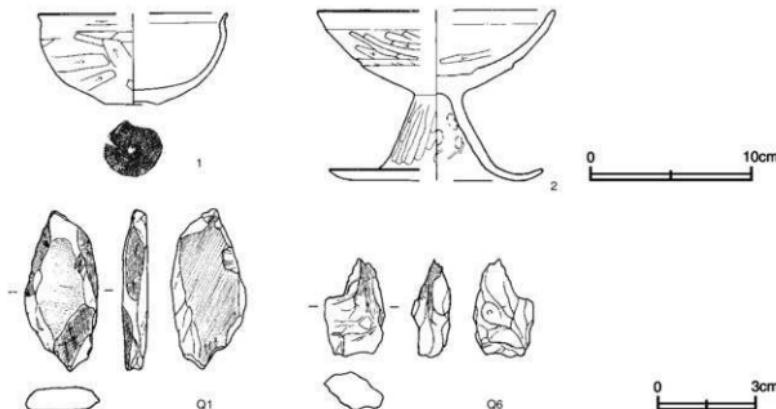


第14図 第1号墳主体部1実測図

主体部1の規模を確認する段階で、周囲も含め土師器片7点（楕）、滑石片2点が、さらに主体部内の覆土上層から土師器片16点（高坏）、剣形模造品の未製品1点、滑石片2点がそれぞれ出土しており、埋葬に際して供獻されたものと想定される。Q1は全面研磨されている未製品である。

主体部1 土層解説

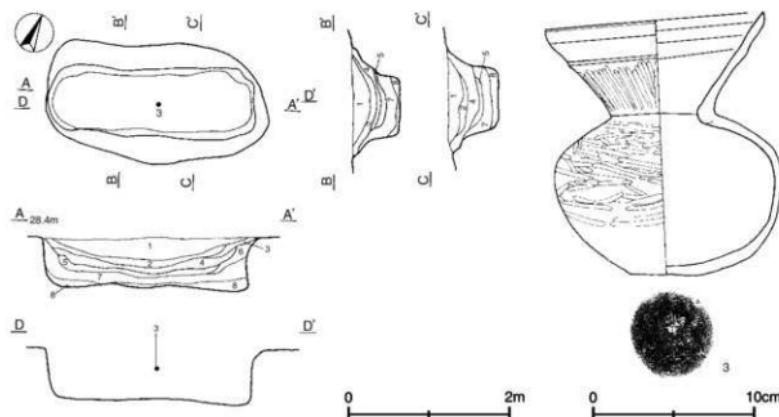
1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック微量	8 褐色	ロームブロック少量
4 黑褐色	ローム粒子微量	9 褐色	ローム粒子中量
5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子微量



第15図 第1号墳主体部1・出土遺物実測図

イ 主体部2

主体部1同様に、墳丘面を旧表土まで掘り下げる段階で、南東側の旧表土面下に落ち込みが検出された。

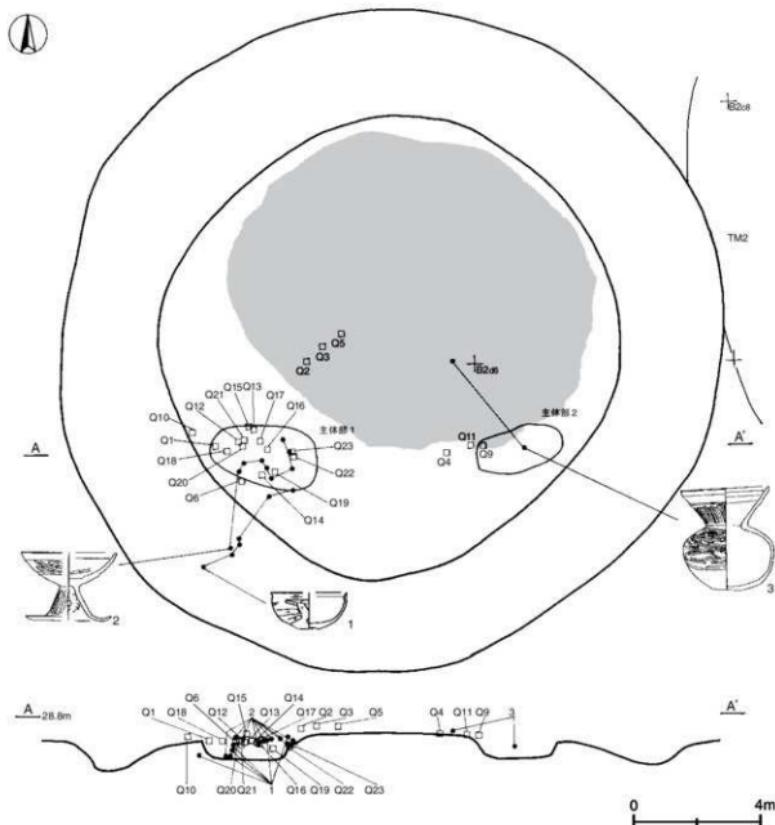


第16図 第1号墳主体部2・出土遺物実測図

B2e6区、形状は長方形を呈し、主軸方向はN-80°-Eである。長軸2.8m、短軸1.4m、深さ60~65cmで、ほぼ平坦な底面を呈し、また壁は東西がほぼ直立し、南北は中段より上方が大きく外傾して立ち上っている。覆土は長・短軸ともにレンズ状に堆積し、第5層の黒色土の締まりはほかの層と比べて弱い。粘土塊や石材片は確認されていないため、本棺直葬と考えられるが棺材なども検出されていない。確認面から滑石片が出土しているが、微碎片で図示できなかった。また中央部の第1層下から3が逆位で出土しており、埋葬に際して供獻されたものと考えられる。

主体部2土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5	黒褐色	ローム粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6	暗褐色	ローム粒子中量
3	褐色	ロームブロック微量	7	暗褐色	ロームブロック少量
4	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8	褐色	ロームブロック少量

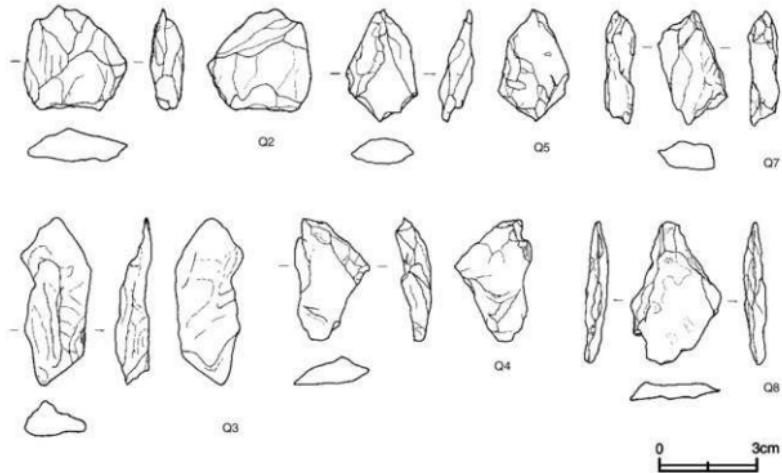


第17図 第1号墳実測図（3）

遺物出土状況 本墳に關わる遺物は、埋葬施設内やその周辺に偏って出土している。3は主体部2の覆土中から出土した体部と墳丘中心部付近の旧表土面から出土した口辺部が接合したもので、破碎して口辺部を墳丘下中心部に置いた後、主体部内に体部を供獻したものと考えられる。1と2は主体部1の確認面及び周溝出土の破片が接合していることから、主体部1への供獻土器が周溝へ流れ込んだものと考えられる。

滑石片は主体部1の覆土から多く出土しているが、中心部付近のQ2、Q3、Q5やQ9、Q11のように主体部2の確認面でもみられるなど、広範囲にわたって出土している。総数は21点で、石核らしきものは検出できなかったが、3.5g以下の細片が12点、荒削段階と思われるものが8点、さらに研磨されて製品に近いQ1の1点である。旧表土面から出土した滑石片の位置や範囲から、盛土構築前の主体部2へ埋葬する段階で供獻されたものと考えられる。

所見 2か所の埋葬施設の主軸方向が異なっており、それぞれの埋葬施設から出土した土器に明確な時期差は認められないが、供獻土器や滑石片の出土状況などから主体部2が構築された後に盛土され、さらに主体部1が追葬されたものと考えられる。本墳の築造時期は、中期中葉（5世紀第2四半期）と考えられる。



第18図 第1号墳出土遺物実測図

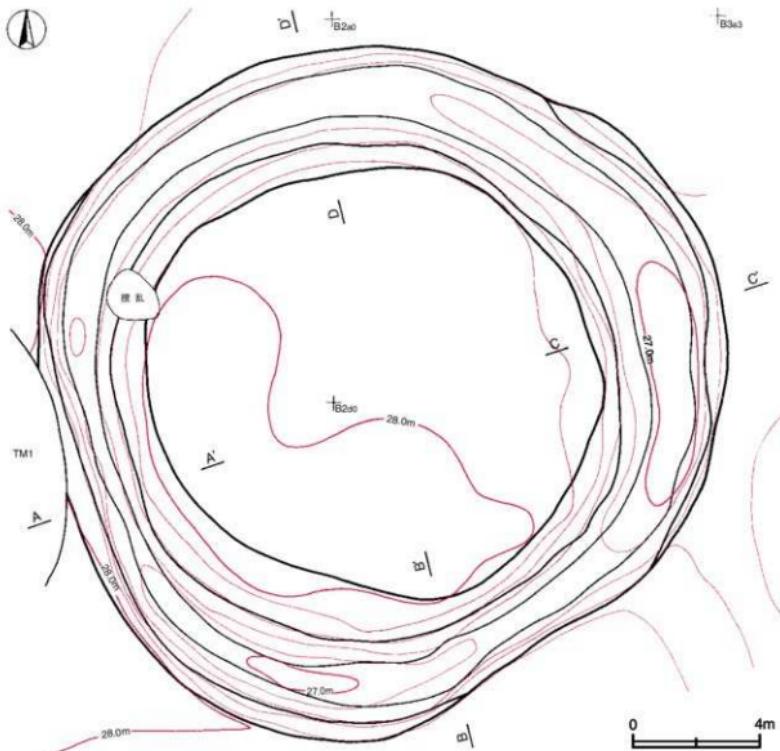
第1号墳出土遺物観察表（第15・16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
									口辺部内・外削ナデ、側面内削ナデ、外削ヘラ削り及ナダ、底部多刃部によるヘラ削り	口辺尾根ナデ、底部内削ヘラ削り及ナダ、外削ヘラ削り、脚部外削ヘラ磨き、底削ナダ、内面削り及工具痕を残す		
1	土師器	榎	[11.8]	5.7	3.4	長石・石英	橙	普通			上主体部1確認 上主体部2確認 周溝下部	PL11 60%
2	土師器	高坏	[14.5]	10.6	[13.2]	長石・石英	明赤褐	普通			上主体部1確認 上主体部2確認 周溝より覆土上部	PL11 50%
3	土師器	壺	13.5	16.4	4.2	長石・石英・紫母・赤色粒子	橙	普通	口辺部内・外削根ナデ、側面外削ヘラ磨き、側面外削削		主体部2確認 上中層、口辺部 蓋土下胎土中	PL11 90%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	側形木製品	5.0	2.3	0.7	12.7	滑石	全面研磨調整。片面両刃状	主体部1覆土上層	PL12
Q2	剥片	3.3	3.3	1.1	11.0	滑石	石核からの剥離片か	盛土下層	PL12
Q3	剥片	5.2	2.2	1.1	9.8	滑石	石核からの剥離片か	盛土下層	PL12
Q4	剥片	3.8	2.4	1.2	6.5	滑石	側面切断痕。表面擦痕	盛土下層	PL12
Q5	剥片	3.5	2.2	1.1	6.3	滑石	片面両刃状。表面擦痕	盛土下層	PL12
Q6	剥片	3.1	1.9	1.2	6.0	滑石	石核からの剥離片か	主体部1覆土上層	PL12
Q7	剥片	3.6	2.2	1.0	6.8	滑石	側面切断痕	周溝覆土中	PL12
Q8	剥片	4.5	2.8	0.75	6.8	滑石	表面擦痕。片面両刃状	周溝覆土中	PL12

第2号墳（第19～22図）

位置 調査区南東部のB 2 d0区を中心に検出され、標高28.0mほどの舌状台地の縁辺部に立地している。西側に第1号墳の周溝が隣接している。



第19図 第2号墳実測図（1）

確認状況 これまで周知されていない古墳で、第1号墳の東側で円形に巡る周溝跡を確認した。

重複関係 第4号土坑に掘り込まれており、第1～3号住居跡の上に築造され、周溝が第2・3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 現丘径が約14.5mで、調査の結果、周溝外縁径が約22mの不整形な円墳と確認した。

墳丘 現況でローム漸移層まで削平されており、盛土の構築状況は不明である。

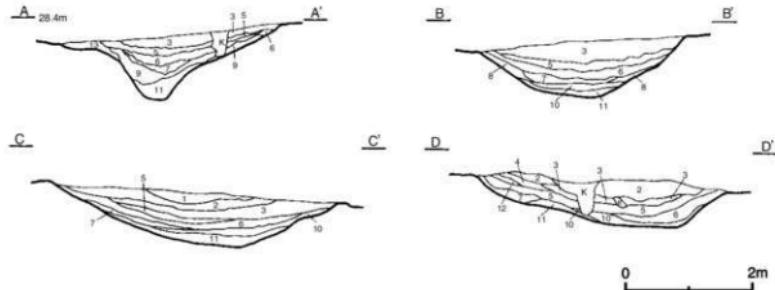
周溝 円形で、上幅2.7～5.0m、下幅0.4～1.7m、深さ0.6～1.0mである。周溝は南・西側の上幅が広く、V字状の断面形を呈しているが、北・東側は緩やかなU字状で浅い断面形を示しており、周溝底部の高低差が1mほどみられるなど、掘り込みに違いがみられる。特に西側は、第1号墳の周溝と重複しないように周溝の幅を狭くして内側に曲げていることから、第1号墳を強く意識して周溝を掘っていることが確認できる。周溝の土層については、第5層の黒褐色土から底面までは周溝外や盛土の流れ込みと思われ、第5層から上の第1層から第4層についてはローム主体の土層で、墳丘を人為的に削平した際の層と考えられる。

周溝土層解説

1	褐色	ロームブロック微量	8	暗褐色	ローム粒子中量
2	褐色	ローム粒子少量	9	褐色	ローム粒子多量
3	褐色	ロームブロック少量	10	褐色	ロームブロック中量
4	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	11	褐色	ローム粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子少量	12	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子中量・炭化粒子微量	13	褐色	ロームブロック少量・炭化粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器壺1点、須恵器甌1点、壺1点、甌1点、甌の体部片10点のほか、短頭壺1点が出土している。これらの遺物は周溝南部の覆土上層から中層にかけて出土しており、前述した墳丘を人為的に削平した際の層に出土レベルがあてはまるところから、被葬者への供獻土器が周溝内に流れ込んだと想定される。5はTK208併行期に比定され、6、7、TP9とともに他地域から供給されたものと思われる。また6世紀後葉の様相を示している4は、周溝の北・南側の覆土中層からそれぞれ出土し、その下層は自然堆積の様相を示すことから、6世紀末頃には周溝が中層付近まで埋没していたと想定できる。8は8世紀後半に比定されるもので、ほかの須恵器とはほぼ同じレベルで出土しており、約4mの範囲でほとんどの破片が散在していることから、墳丘削平の影響を受けたものと推定される。

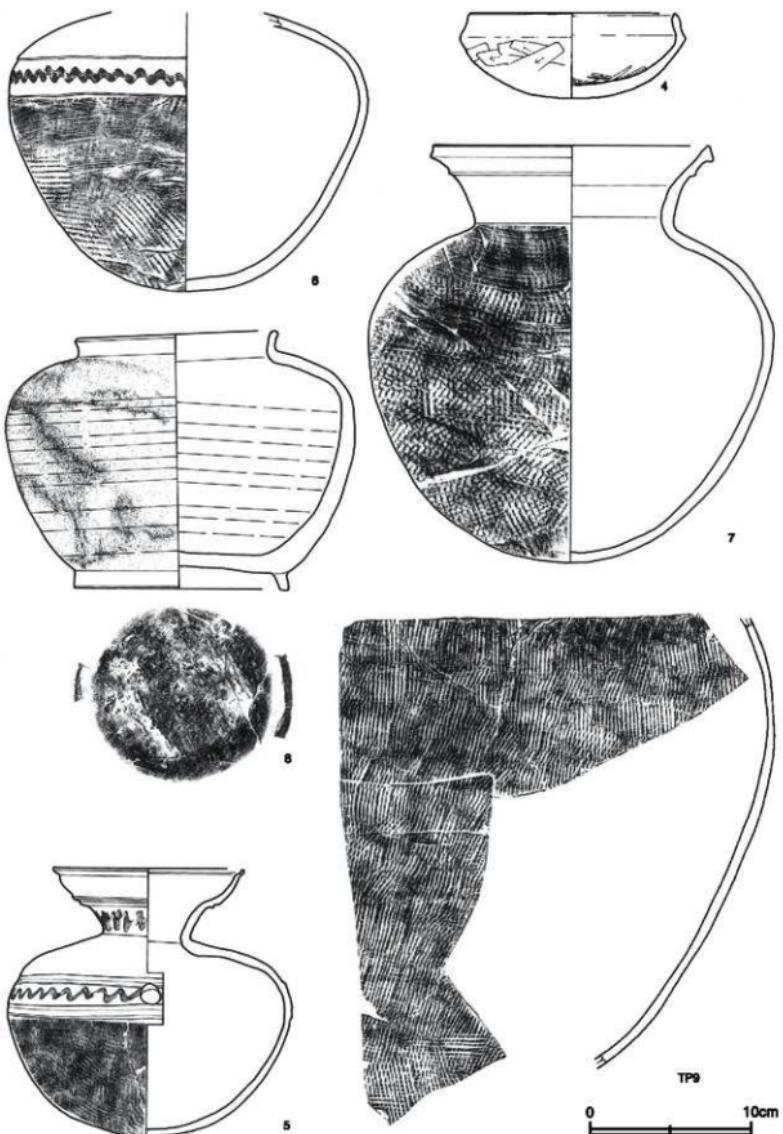
所見 第1号墳の周溝を掘り込むことなく意図的に内側に曲げている周溝から、第1号墳の後に築造されたと考えられる。また出土した須恵器の様相から、本墳は中期中葉（5世紀第3四半期）に築造されたものと思われる。



第20図 第2号墳実測図(2)



第21図 第2号墳遺物出土状況



第22図 第2号墳出土遺物実測図

第2号墳出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	土師器	壺	12.8	5.3	—	長石・石英・赤色粒子	灰	普通	口辺部内・外面ナメ、体基内面ハラ磨き、外面ハラ削り、底部摩耗。	周溝北・南部 覆土上中層	PL11 70%
5	須恵器	壺	11.8	16.6	—	長石	灰白	普通	口辺部内・外面ナメ、腹部外側面5本にによる直状文、一部移走あり、腹部外側面上2本の平行直文、腹内に直文4本による波状文。体部・底部粒子目附き。	周溝南端 覆土上中層	PL11 80%
6	須恵器	壺	—	17.4	—	長石・石英	灰黄	普通	体部外側面叩き目附、比較間に多状飾面の波状文。	周溝東部 覆土上中層	PL11 40%
7	須恵器	壺	17.2	26.0	—	長石・石英	褐灰	普通	口辺部内・外面ナメ、体基内面ナメ。当て真枚を残す。外曲粒子目附。	周溝南端 覆土上中層	PL11 70%
8	須恵器	短颈壺	12.3	16.2	13.2	長石・石英	褐灰	普通	体部外側面ロクロナメ、高台貼り付け	周溝東部 覆土上中層	PL11 自然輪
TP9	須恵器	壺	—	(28.0)	—	長石	灰色	良好	体基内面ナメ当て具板を残す。外面平行叩き	周溝南端 覆土上中層	PL10

表3 古墳一覧表

番号	位置	墳形	丘主軸方向	墳丘規模(m)		周溝規模(m)			埋葬施設	主な出土遺物	時代	備考 新旧関係 (旧→新)
				全長(径)	高さ	最大上幅	最大下幅	深さ				
1	B 2 d5	円墳	—	15.0	0.9	3.8	0.9	0.6~1.0	木棺直葬	土器部(施、高环、滑石片)	5世紀中期	植物含有率→本塚=51.5 →S1.5
2	B 2 d0	円墳	—	14.5	—	5.0	1.7	0.6~1.0	—	須恵器(壺、壺、壺)	5世紀中期	植物含有率→本塚=60% →S1.4

(2) 土坑

第1号土坑（第23図）

位置 調査区中央部のB 2 d2区、標高28.3mの第1号墳西側に位置している。

規模と形状 長軸2.6m、短軸1.6mの長方形で、深さは45~50cmである。底面は平坦で、各壁とも外傾して立ち上がりっている。主軸方向はN-65°-Wである。

覆土 5層からなる。全体的にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

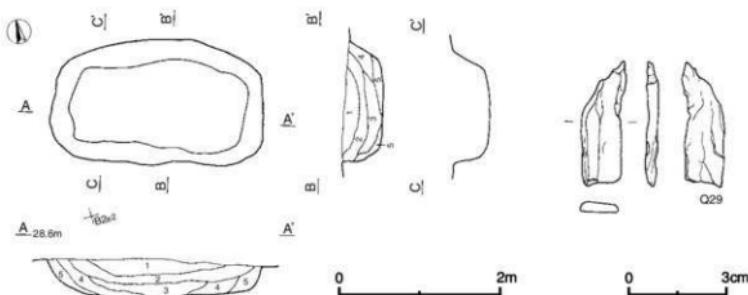
土層解説

- | | |
|-------|-------------------|
| 1 黒 色 | ローム粒子・晚上粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |

- | | |
|-------|------------------|
| 4 茶 色 | ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 確認面や覆土上層から土師器片8点（壺1、壺7）が出土しているが、細片で図示することができない。また覆土中から滑石の碎片1点が出土している。

所見 遺物の様相から、時期は中期で墓坑と推定される。



第23図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表（第23図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q29	調片	3.9	1.4	0.4	2.5	滑石	側面切断痕、表面擦痕	覆土中	PL12

第3号土坑（第24図）

位置 調査区南東部のB3f1区、標高27.8mの第2号墳の南東側に位置している。

規模と形状 長軸2.8m、短軸1.1mの長方形で、深さは66~78cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。主軸方向はN-54°-Eである。

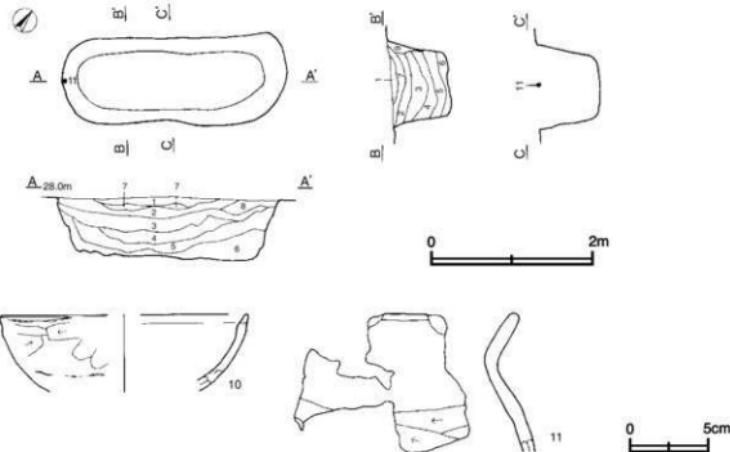
覆土 9層からなる。ロームブロックを多く含み、人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	7 暗赤褐色	ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化物微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 黑褐色	ローム粒子少量
5 黑褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 土師器片55点（环5、甕50）のほかに、混入した弥生土器片6点、須恵器片1点（环）が出土している。11は南西壁の確認面から出土した接合資料である。10は覆土中からの出土で、ほかの遺物は細片である。

所見 遺物の様相や出土状況から、時期は中期で墓坑と推定される。



第24図 第3号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10 土師器	環	(15.2) (4.7)	-	長石・石英・針状鉱物	明黄褐色	普通	口沿部内面わずかに外傾、外面ナデ後沈練施元底部内面ナデ、外面ヘラ削り、輪削り		覆土中	15%	
11 土師器	甕	- (8.6)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口沿部・外面部、底部・外面部ヘラ削り		覆土上層	5%	

第6号土坑（第25図）

位置 調査区北部のB 2 a7区、標高27.6mの第1号墳の北側に位置している。

規模と形状 長軸2.55m、短軸0.9mの隅丸長方形で、深さは60~65cmである。底面は平坦で、南及び西壁は外傾して立ち上がり、北及び東壁はほぼ直立している。主軸方向はN-66°-Wである。

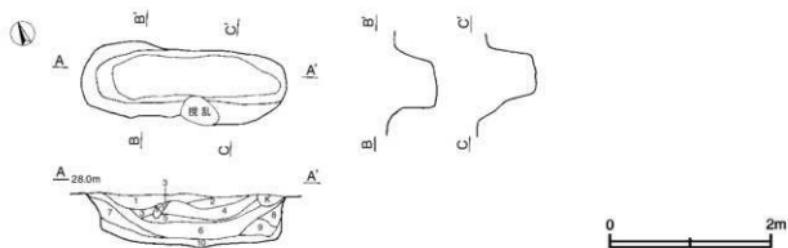
覆土 10層からなる。ロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗褐色	ローム粒子少量
3	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子中量
4	黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9	褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック微量	10	褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片3点（壺）のほかに、混入した弥生土器片6点が出土している。すべて細片で、図示できるものはない。

所見 遺物は細片であるが、古墳の周囲に位置しており、ほかの土坑と形状が類似していることから、時期は中期で墓坑と推定される。



第25図 第6号土坑実測図

表4 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備時	考期
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)						
1	B 2 d2	N-65°-W	長方形	2.6 × 1.6	45~50	人為	平坦	外傾	土師器片(壺、甌)、滑石片	中期	
3	B 3 f1	N-54°-E	長方形	2.8 × 1.1	66~78	人為	平坦	外傾	土師器片(壺、甌)	中期	
6	B 2 a7	N-66°-W	長方形	2.55 × 0.9	60~65	人為	平坦	外傾・直立	土師器片(甌)	中期	

4 近世の遺構と遺物

近世の遺構は、溝跡1条が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

溝跡

第2号溝跡（第26図）

位置 調査区西部のB 1 b8~A 1 j0区で、標高26.4~26.8mの台地上に位置している。

重複関係 第1号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 L字状で調査区域外に延びており、長さ約13mのみ確認できた。西は台地縁辺部、北は第1号溝と平行して直線的に傾斜面部へ延びている。上幅0.8~1.4m、下幅0.2~0.6m、深さ0.15~0.3mであり、断面形はU字状を呈し、壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、主軸方向はN-90°-WとN-20°-Eにそれぞれ向いている。

覆土 3層からなる。周囲から流れ込んだレンズ状の自然堆積を示している。

土層解説

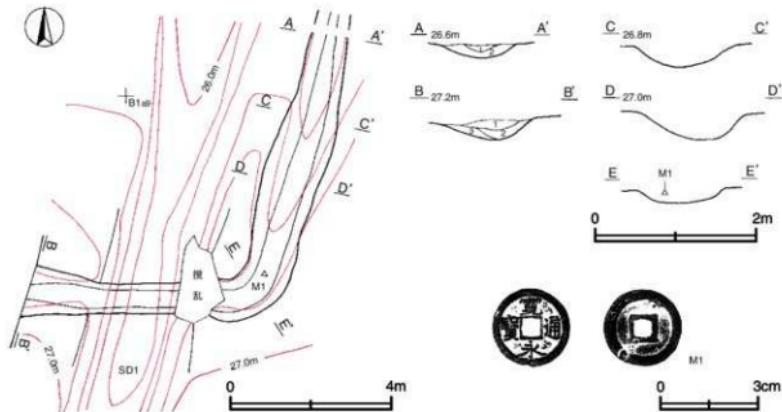
1 黒褐色 ローム粘土微量

2 暗褐色 ロームブロック少量、砂質粘土微量

3 褐色 ローム粘土少量、砂質粘土微量

遺物出土状況 覆土中層から古銭1点が出土しているほか、混入した繩文土器片5点が出土している。

所見 第1号溝跡との重複関係や古銭の出土状況から、近世の溝と考えられ、周辺の集落に関連する区画溝の可能性が考えられる。



第26図 第2号溝跡・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表（第26図）

番号	銭名	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通宝	2.4	0.6	2.9	1636	銅	古寛永、無背銘、銅一文銭	覆土中層	PL12

5 その他の遺構と遺物

今回の調査で時期が明確でない土坑3基、溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑

第2号土坑（第27図）

位置 調査区南部のB 2e2区、標高28.2mの第1号墳西側に位置している。

規模と形状 長径2.04m、短径1.3mの長楕円形で、深さは80~110cmほどである。壁は北では直立し、南では外傾して立ち上がり、東・西ではオーバーハングしている。主軸方向はN-63°-Wである。

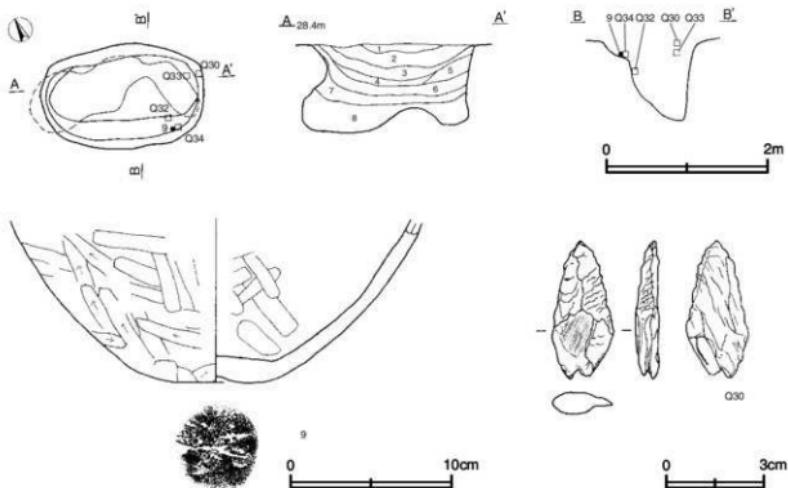
覆土 8層からなる。全体的にローム主体であるが、自然堆積の状況を示している。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	5 黑褐色	ローム粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子少量	6 黑褐色	ローム粒子中量
3 喀褐色	ロームブロック少量	7 黑褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ロームブロック少量	8 黒褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片8点(壺3、壺5)、滑石片5点(剝形未製品1、剥片4)が覆土上層から、また覆土中から縄文土器の細片が出土している。土師器片及び滑石片はすべて本跡東側の覆土中層から上層で出土している。9は覆土上層から出土し、Q30は一部研磨痕もみられる。滑石片4点は5g未満の碎片で、図示することはできない。

所見 出土遺物から古墳時代の土坑とも考えられるが、形状などが縄文時代の陥し穴と類似しており、明確でない。



第27図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表(第27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	土師器	壺	-	(10.2)	5.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面へラ削り。底部わずかにくぼむ	覆土上層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q30	剝形未製品	4.3	1.9	0.7	6.2	滑石	表面中央部棱をもち研磨痕あり	覆土上層	PL12

第4号土坑（第28図）

位置 調査区南部のB 3e2区、標高27.8mの第2号墳の周溝内に位置している。

重複関係 第2号墳の周溝を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.5m、短径1.05mの楕円形で、深さ110cmである。底面は平坦で、壁は直立し、主軸方向はN-44°-Wである。

覆土 8層からなる。全体的にロームブロックを多量に含んでおり、人為堆積と思われる。

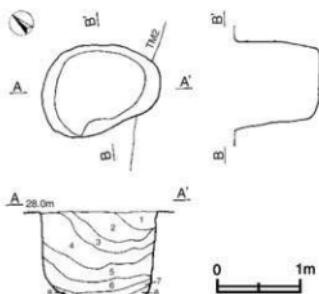
土層解説

1	褐 色	ロームブロック中量
2	褐 色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
3	褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	褐 色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
5	暗褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
6	褐 色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
7	暗褐 色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
8	褐 色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片1点（壺）が覆土中から出土している

が、覆土の様相から埋め戻しの際に混入したものと考えられる。

所見 第2号墳築造後の土坑であること以外は不明である。



第28図 第4号土坑実測図

第5号土坑（第29図）

位置 調査区南部のB 2f5区、標高27.8mの第1号墳の南部周溝内に位置している。

重複関係 第1号墳の埴丘を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.87m、短径0.63mの楕円形で、深さは42cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がり、主軸方向はN-58°-Eである。

覆土 3層からなり、全体的にローム粒子を多量に含んでいる。堆積状況は不明である。

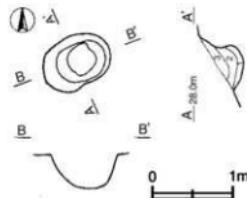
土層解説

1	黒褐 色	ローム粒子微量
2	黒褐 色	ローム粒子少量
3	暗褐 色	ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片6点、土師器片3点が出土している。

いずれも細片で、図示することができない。

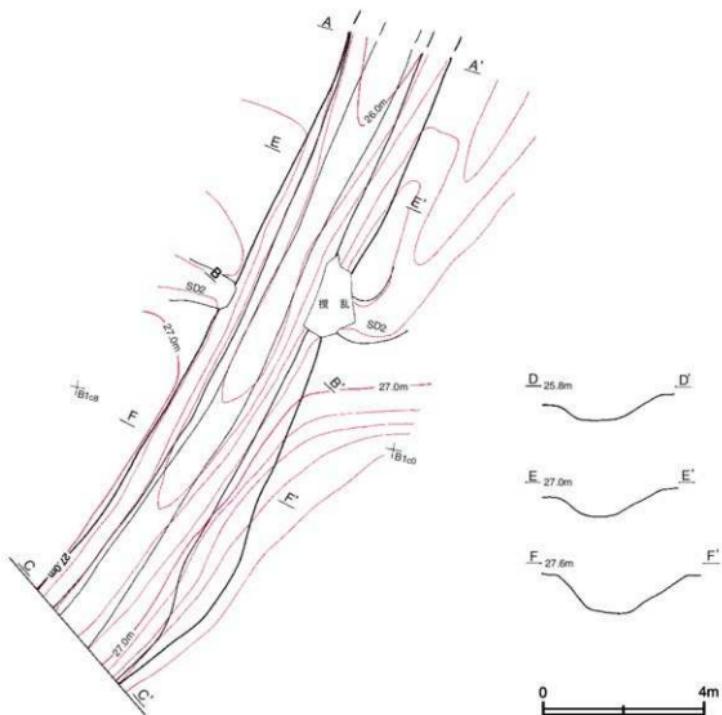
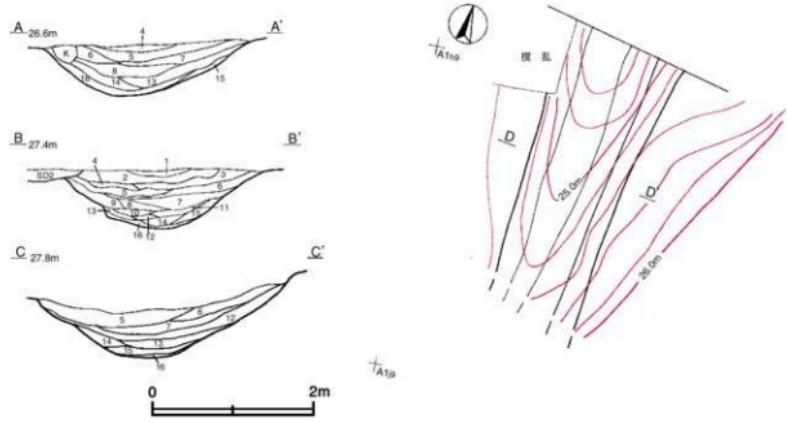
所見 第1号墳築造後の土坑であること以外は不明である。



第29図 第5号土坑実測図

表5 時期不明土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		覆土	底面	壁面	主な出土遺物	備 考 期
				長径(幅)×短径(幅)(m)	深さ(cm)					
2	B 2e2	N-63°-W	長楕円形	2.04×1.30	80~110	自然	有段	外傾・直立	土師器片（环・壺）、削影系製品、滑石片	TM 2→本跡
4	B 3e1	N-44°-W	楕円形	1.50×1.05	110	人為	平坦	直立	土師器片（壺）	TM 2→本跡
5	B 2f5	N-58°-E	楕円形	0.87×0.63	42	不明	皿状	外傾	弥生土器片、土師器片	TM 1→本跡



第30図 第1号溝跡実測図

(2) 溝跡

第1号溝跡（第30図）

位置 調査区西部のA 1 g9～B 1 d8区で、標高25.2～27.0mの台地上に位置している。

重複関係 第2号溝に上幅の一部を掘り込まれている。

規模と形状 調査区域外の斜面部へ延びており、約28cmほどの長さを確認した。上幅2.3～3.6m、下幅0.5～0.9m、深さ0.5～0.9mであり、断面形はU字状で、壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、主軸方向はN-20°-Eである。

覆土 16層からなる。周囲から流れ込んだ自然堆積の状況を示している。

土層解説

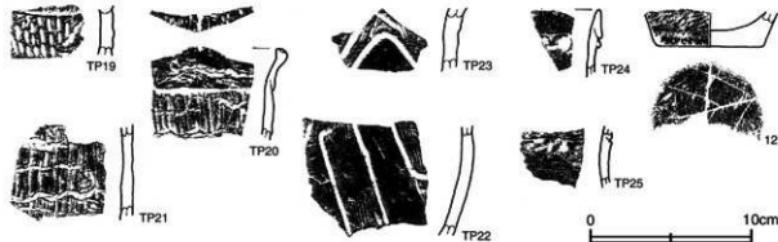
1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9	黒褐色	ローム粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量	10	暗褐色	ローム粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック微量	11	褐色	ローム粒子中量
4	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	12	暗褐色	ロームブロック微量
5	暗褐色	ロームブロック少量	13	褐色	ロームブロック少量
6	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	14	褐色	ローム粒子中量、砂質粒子微量
7	黒褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	15	褐色	ローム粒子多量
8	黒褐色	ローム粒子中量	16	黒褐色	ローム粒子少量

遺物出土状況 壺の体部と思われる土師器片1点が覆土中層から出土しているが、細片で図示できなかった。

所見 ほぼ均一なU字状の掘り込みを呈し、台地縁辺部から直線的に斜面部へ延びていることから、区画溝と考えられる。第2号溝に掘り込まれていることから、時期は近世より古い溝である。

(3) 遺構外出土遺物

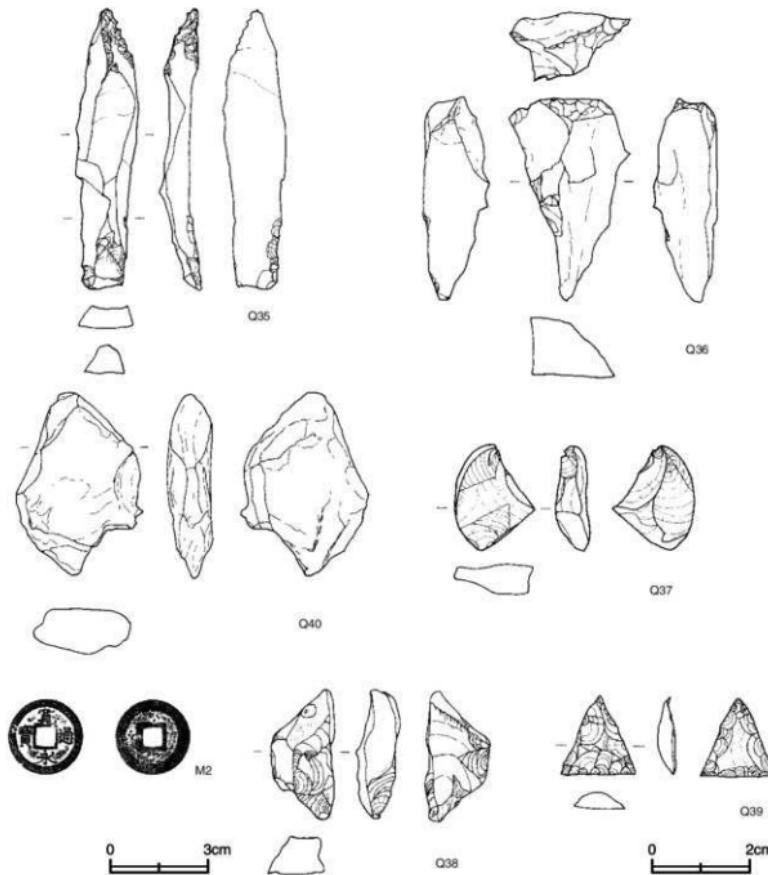
当遺跡から出土した遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第31図 遺構外出土遺物実測図（1）

遺構外出土遺物観察表（第31・32図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP19 縄文土器	深鉢	-	(3.1)	-	長石・石英	黄褐色	普通	削部外面工具による刺突文	SI11 覆土中	FL112 前削痕半	
TP20 縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部工具によるキザミおよび側面圧痕文施文、口沿部外周側面ねじれ圧痕文施文、側面圧痕文施文、削部外面工具による縦などり後、側面圧痕文施文	TM1 周溝覆土中	FL112 前削痕半	
TP21 縄文土器	深鉢	-	(5.9)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	削部内部内面方向のヒザナテ、外面工具による縦などり後、側面圧痕文施文	TM1 周溝覆土中	FL112 前削痕半	



第32図 遺構外出土遺物実測図 (2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎	土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP22	縄文土器	深鉢	—	(6.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	沈継区間に微凸状文充填	TM1 四隅直土 中	F112	後期初頭
TP23	縄文土器	深鉢	—	(3.9)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	沈継区間に微凸状文充填	TM1 四隅直土 中	F112	後期初頭
12	弥生土器	壺	—	(2.2)	6.6	長石・石英	にぶい橙	普通	側部外面附加条一種(附加二条) 縄文施文。底 部木葉壓	表土		後期 5%
TP24	弥生土器	壺	—	(4.2)	—	長石・石英・纈	にぶい橙	普通	複合口辺部下刺突文施文	SK 3 覆土中	F112	後期後半
TP25	弥生土器	壺	—	(3.9)	—	長石・石英・纈	灰褐色	普通	複合口辺部外面下端沈継模走後、網文施文	TM1 四隅直土 中	F112	後期後半

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q35	ナイフ形石器	8.8	1.9	1.3	15.5	頁岩	縦長剥片を素材とし、先端部片側のみ調整	TM1周溝覆土中	PL12
Q36	剥片	6.4	3.8	2.0	33.0	珪質頁岩	薄葉を素材とし、裏面は加熱により除去、背面に微細な剥離痕	TM1周溝覆土中	PL12
Q37	剥片	3.2	2.5	1.0	7.2	チャート	側面は自然面を残し、背面は多方向からの剥離痕	S11 覆土中	PL12
Q38	剥片	2.7	1.3	0.8	3.1	黒曜石	側面に微細な剥離痕あり	TM1周溝覆土中	PL12
Q39	石礫	1.5	1.6	0.35	0.7	頁岩	両面押圧剥離による加工、無茎	S2 覆土中	PL12
Q40	砂片	5.7	4.0	1.4	37.9	滑石	表面擦痕	表土	PL12

番号	銘名	径	孔幅	重量	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M 2	寛永通宝	2.3	0.65	2.1	1697	銅	新寛永、無背銘、銅一文銭	表土	PL12

第4節 まとめ

調査の結果、縄文時代の遺物包含層1か所、弥生時代の住居跡3軒、古墳時代の古墳2基、土坑3基、近世の溝跡1条、時期不明の土坑3基と溝跡1条が確認された。このことから、当遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、中でも古墳時代中期の墓域を中心であることが明らかになった。ここでは確認された遺構と遺物について各時代ごとに概観し、若干の考察を行う。

1 旧石器時代から縄文時代まで

旧石器時代の遺物としてナイフ形石器1点、剥片3点が出土している。材質はナイフ形石器が頁岩で、剥片は斑晶が目立つ黒曜石であり、すべて第1号墳の周溝内からの出土である。第1号墳の埴丘面下を調査したが、縄文土器の包含層が確認されただけで、旧石器時代の遺物は原位置では確認できなかった。

縄文時代の土器片は前期後半の貝殻状痕文系、前期末葉の平行沈線文系と側面压痕文系が出土している。また第1号墳周溝から後期初頭の土器片や石礫が出土しており、生活領域の一部であったと考えられる。

2 弥生時代

堅穴住居跡が3軒検出され、うち2軒は第2号墳の周溝に掘り込まれている。第1号住居跡の床面から出土した頸部片は刺突文の施文がみられ、後期前半の時期と考えられる。また第2号住居跡の下層から出土した頸部片は、櫛歯状工具の波状文が粗雑に描かれており、さらに条間の間隔が不揃いで後期後半の時期と考えられることから、狭い範囲でやや時期の異なる集落が小規模ながら形成されたと推定され、時期的には後期に大別できる。

また、石英片が4点出土している。石英の使用目的については不明であるが、県南地域では弥生時代後期の住居跡から石英片が出土している報告例が増加している。1g程度の碎片や20gほどの剥片が出土していることから、住居内で製作されていたものと推定できるが、その用途については明確でない。

さらに第1号住居跡の炉の周りから黒色土の層が検出されている。村内の根本遺跡からも同様の住居跡が確認されており、中村哲也氏は周辺の黒ボク土と住居内の黒色土が類似していたことから住居内に散布された可能性を指摘しているが¹⁾、散布行為については明確でない。当時の住居の在り方を解明していくためにも、今後の資料の増加を待ちたい。

3 古墳時代

古墳時代になると古墳2基が台地の縁辺部に構築され、さらに土坑3基も古墳の周囲から確認されている。ここでは2基の古墳と周囲の土坑、さらには両者の関連性について述べる。また周囲の遺跡については、谷を挟んだ野中遺跡の古墳や八枚原古墳群、同じ台地上に立地する刈満田遺跡や請領妙山遺跡など古墳時代中期の遺跡の様相について今後の報告が待たれるところであり、今後沢田古墳群の詳細を明らかにするためにも周辺の古墳との比較や集落の関わりについても究明していきたいと考えている。

(1) 古墳の形態について

調査区内で検出された2基の古墳はともに20mほどの円墳であることが確認された。その2基の古墳の周溝は隣接しており、第2号墳の周溝が第1号墳の周溝と重複しないよう、内側に意図的に曲げていることから、先に第1号墳が築造されたと確認できる。

第1号墳は盛土が多少残っており、その状況から旧表土面にロームを平面的に積み上げて構築したものと考えられる。第2号墳については盛土が削平されているため明確ではないが、第1号墳と周溝の掘り込みが類似していることから、盛土の構築方法についても類似していたと想定される。

また、第1号墳の2か所の埋葬施設は、それぞれ裾部の旧表土を掘り込む主軸方向が異なった木棺直葬と思われる堅穴である。この埋葬形態は茨城県や千葉県、栃木県などに分布している埋葬施設の位置が墳丘中心部からはずれた「特異埋葬施設古墳」の一例と考えることができる²⁾。

(2) 出土遺物について

第1号墳は滑石を伴う古墳であるが、製品は1点もなく碎片や剥片が旧表土面上に散在していることが特徴的である。それらは一部研磨されたものや研磨されているが穿孔されていないもののほか、剣先が折れたような破片、さらに菱形状の剥片など製作途中と推測できるものもみられ、石核は出土していないことから、碎片状の滑石を古墳築造時に薫くという祭祀的な行為が想定される。その行為の意義については明確でないが、周辺部では谷を挟んで西側に位置している八枚原古墳群内の野中遺跡で調査された住居跡から滑石片が出土し³⁾、北東の安中台地に位置している根本遺跡の中期古墳からも石製模造品の未製品21点（劍形1、有孔円盤20）と剥片が大量に出土し⁴⁾、類似点が認められており、関連が想定される。

第1号墳の主体部1から椀・高坏、主体部2からは壺がそれぞれ出土している。これらの特徴を櫻村宣行氏の編年でみると、主体部2は5世紀第2四半期に、主体部1は第3四半期に比定される⁵⁾。

第2号墳周溝からは甕1、壺1、甕2の須恵器が出土している。すべて周溝の南側に集中していることから、墳丘南側の裾部付近に供獻されていたものと推測できる。埋葬施設の痕跡が検出されなかったことから、主体部は盛土中にあり、さらに旧表土面に須恵器が散在していたことは古墳築造前の地鎮祭的な祭祀行為の存在が想定される。時期については、甕の様相がT K208併行期と考えられ、壺や甕も同時期のものと考えられることから、5世紀第3四半期に比定される⁶⁾。

出土遺物から古墳の築造時期について考えると、5世紀第2四半期に第1号墳の主体部2に被葬者が埋葬され、さらに5世紀第3四半期には主体部1に被葬者が追葬されたと考えられ、この後に第2号墳が築造されているが、主体部2との時期差については明らかにできなかった。

(3) 古墳と周囲の土坑との関係について

3基の土坑は本文でも述べたように古墳と同時期の墓坑の可能性が考えられる。古墳の埋葬施設との主軸方向について比較してみると、第1、6号土坑は第1号墳の主体部1とほぼ同じ軸線とみることができる。第3号土坑は第1号墳の2か所の埋葬施設と主軸が異なっており、また第2号墳に埋葬施設の痕跡は

みられなかったことから、軸線で比較することはできないが、位置から第2古墳と関わりをもつ土坑と推定される。これら3基の土坑は2基の古墳を取り巻くように位置していることから、それぞれが古墳と密接に関連のある追葬的な墓坑と想定される。

4 近世の溝について

近世では溝跡1条が確認され、寛永通宝が出土している。溝は底面に砂質粒子が検出されたが流路とは考えにくく、一時的な豪雨などが流れた区画溝の可能性が高く、周囲の受領地区との関係があると推測できる。

註

- 1) 中村哲也ほか『根本遺跡』美浦村・陸平調査会 1996年3月
- 2) 黒澤彰哉「常総地域における群衆墳の一考察－茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から－」『斐良岐考古』15
斐良岐考古同人会 1993年6月
- 3) 中村哲也ほか『野中遺跡 第2次発掘調査報告書』美浦村教育委員会 2000年3月
- 4) 註1) と同じ
- 5) 横村宣行「和泉式土器編年考－茨城県を中心として－」『研究ノート』5 茨城県教育財団 1966年6月
- 6) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年7月

参考文献

- ・松田光太郎「興津式土器の分類とその変遷（上）」「神奈川考古」31 神奈川考古同人会 1995年4月
- ・松田光太郎「東関東における縄文前末葉土器群の諸様相－栗島台土器の再設定－」「神奈川考古」36 神奈川考古同人会 1995年4月
- ・小玉秀成「茨城県内の弥生後期土器編年の現状と問題点」「十王台式土器制定60周年シンポジウム 茨城県における弥生時代研究の到達点」茨城県考古学協会・十王町教育委員会 平成11年11月

写 真 図 版



遺跡全景



第1号墳 調査前現況（北から）



第1号墳 完掘状況（北から）

PL 2



第1号墳 周溝完掘状況（北から）



第1号墳 周溝完掘状況（東から）



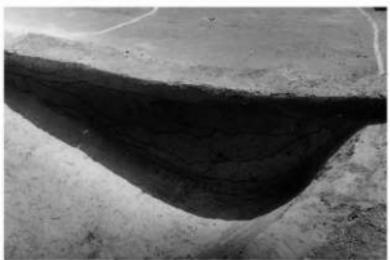
第1号墳 墓丘土層断面（北から）



第1号墳 墓丘土層断面（西から）



第1号墳 周溝土層断面（東）



第1号墳 周溝土層断面（西）



第1号墳 周溝土層断面（北）



第1号墳 周溝土層断面（南）



第 1 号 墓
主体部 1 确認状況



第 1 号 墓
主体部 1 完掘状況



第 1 号 墓
主体部 1 土層断面



第 1 号 墓
主体部 2 完掘状况



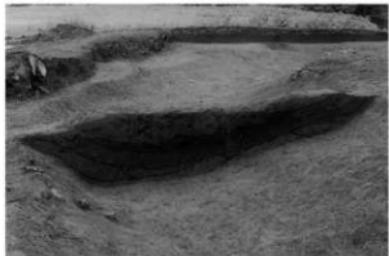
第 1 号 墓
主体部 2 遗物出土状况



第 1 号 墓
主体部 2 土層断面



第2号墳 完掘状況



第2号墳 周溝土層断面（北）



第2号墳 周溝土層断面（南）



第2号墳 周溝土層断面（東）



第2号墳 周溝土層断面（西）



第 2 号 墓
周溝遺物出土狀況



第 2 号 墓
周溝遺物出土狀況



第 1 · 2 号 墓
周溝 隊 接 狀 況



第 1 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 1 号 土 坑
完 挖 状 況



第 3 号 土 坑
完 挖 状 況



第 6 号 土 坑
完 挖 状 況

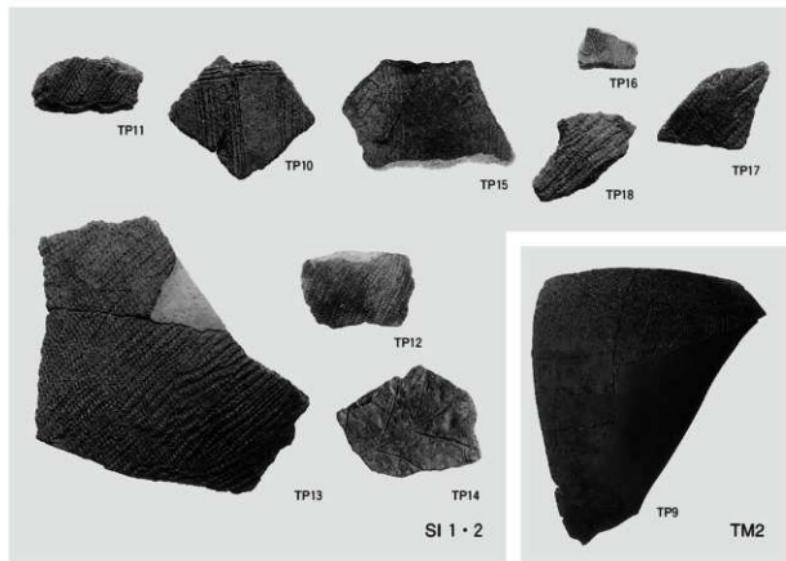
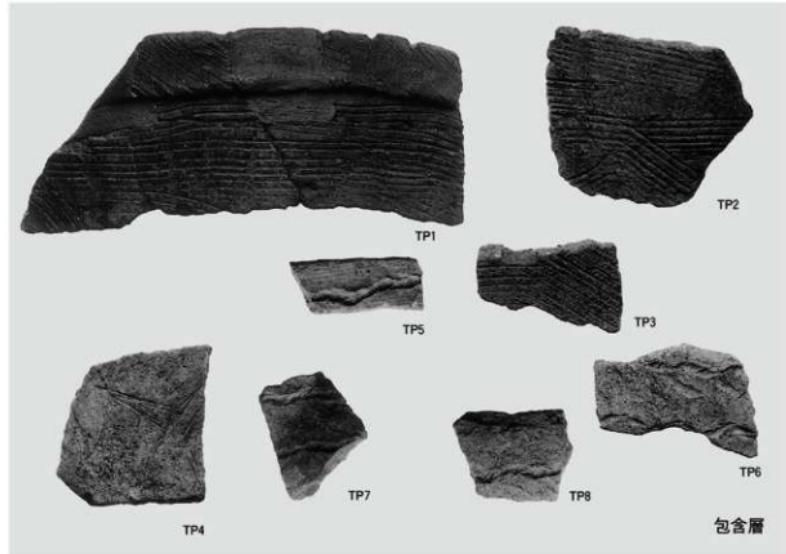


第 2 号 土 坑
完 挖 状 況



第 1 · 2 号 溝 道
完 挖 状 況

PL10

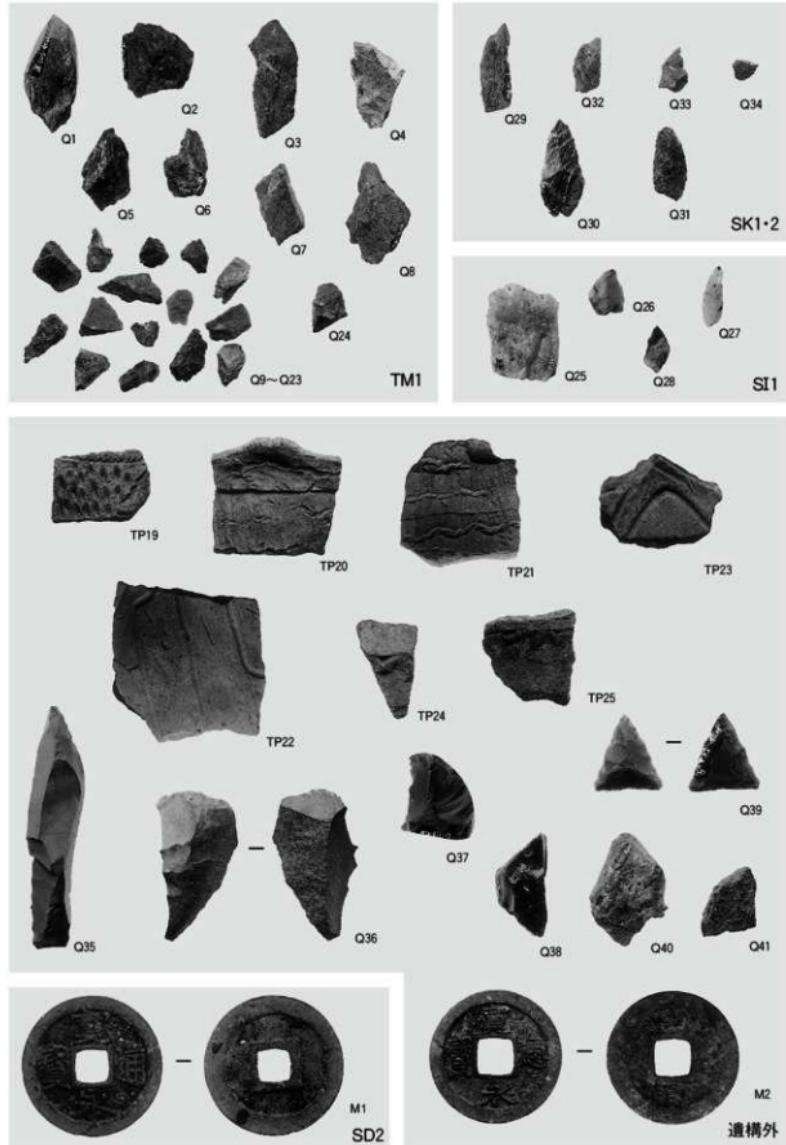


包含層、第1・2号住居跡、第2号出土遺物



第1·2号墳出土遺物

PL12



第1号墳、第1・2号土坑、第1号住居跡、第2溝跡、遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第276集

沢田古墳群

国道125号大谷バイパス建設事業
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1

平成19(2007)年 3月19日 印刷
平成19(2007)年 3月23日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 いばらき印刷株式会社
〒319-1112 茨城県那珂郡東海村村松字平原3115-3
TEL 029-282-0370